

# 副詞 “也” の作用域について

椿 正 美

## はじめに

〔NP + “也” + VP〕を構成する副詞“也”は、分類上「判断的な副詞」の一種である範囲副詞に属し、同一出来事の表示が機能として認められる<sup>(1)</sup>。和訳の際には通常「も」が当てられるが、その作用域をNPに推定する場合とVPに推定する場合とでは、訳文全体の内容は大きく異なる<sup>(2)</sup>。例えば“他也是老师”には①「彼も教師です」②「彼は教師でもあります」の二種類の訳文が成立する。

このような副詞“也”を含む中国語文の正確な訳出を最終的な目標に掲げ、拙稿「副詞“也”の用法について」ではVPが“也”の作用域となる場合の条件について考察し、並列複文では前後フレーズのVPに対立関係、累進複文では拡張関係、連続複文では時間の経過が成立する可能性について述べた<sup>(3)</sup>。今回は、“也”の作用域をNPに推定する条件とVPに推定する条件の違いについて更に深く分析を進め、結果として、NPを含む主体の数量、VPを含む行為や状態、即ち現象の数量も推定の重要な根拠となることが判明した。

本論では、“也”の作用域を推定する手段として主体や現象の数量に基づく上記の手法が適切であるとの可能性について述べていく。尚、明らかにVPを作用域とする“也”の使用例を選出する必要があるため、資料には原文の使用言語を日本語とする翻訳小説《雪国》（『雪国』）《金閣寺》（『金閣寺』）《透光的树》（『透光の樹』）《厨房》（『キッチン』）《银河铁道之夜》（『銀河鉄道の夜』）を利用した。

## 1. 複文に含まれた“也”の作用域と機能

本論の資料となる全ての作品に於ける“也”の使用回数を作用域の推定箇所によって二分し、《表1》を作成した。

《表1》

	作用域が NP	作用域が VP
《雪国》	225	51
《金閣寺》	348	108
《透光的树》	352	79
《厨房》	240	40
《银河铁道之夜》	88	16

これを見ても、“也”の使用頻度はVPを作用域とする場合よりもNPを作用域とする場合の方が高いことは明白である。本章では、複文での使用例を提示し、VPを作用域とする“也”の機能について紹介する。

### 1. 1. “也”の使用による効果

“也”の作用域がVPであるとの結論を導く条件には、まず同じNPが連続し然もVPが異なる複文の後部フレーズの直前に“也”が置かれる形式が挙げられる。この形式について馬真 1982 は公式〈XW1, X也 W2〉を設定した。次に例文を示す。

(1) 因为我不做任何幻想, 我也不想让女人来参与我的人生。(《金》)

(私は何も夢みてはいず、女によって人生に参加しようなどと思っではないからだ。)

(1) では単独の動作主を示す“我”がNPとして両フレーズに反復使用され、前部と内容の異なる後部フレーズ“不想”以下の部分、即ちVPが“也”の作用域であると容易に推定できる。但し、〈XW1, X也 W2〉は文学作品中に使用例が極めて少なく、本論の出典作品でも上記の(1)以外に使用例は全く見られない。

更に、後部フレーズのNPのみが省略された例も多く見られ、その形式については馬真 1982 も〈XW1, 也 W2〉の成立を認めている。W1とW2の内容には様々な関係が成立し、“也”は2種の述語または目的語に生じる差異の表示や強調に効果を発揮している。次に例文を示す。

(2) 我没有钱, 没有自由, 也没有解放。(《金》)

(私には金もなく、自由もなく、解放もなかった。)

(3) 左边可以看到利休喜爱的桑木百宝架, 也可以看见隔扇壁画。(《金》)

(左方に利休好みの桑棚も見える。襖絵も見える。)

(4) 商店橱窗里的灯光照亮了人行道, 也映亮了川流不息的行人的脸庞。(《厨》)

(デパートの窓明かりが歩道を明るく照らし、とぎれなくゆきかう人々の顔も白く輝いて見える。)

(2)(3)(4)は何れも最初のフレーズのNPのみが保存された形式の複文であり、それを共通の主体とするVPが各フレーズに含まれている。また、呂叔湘 1980 の分類法に従えば、(2)の形式は「主語、動詞の相当、目的語の不同」、(3)(4)の形式は「主語の相当、述語の不同」に当たり、異同が認められる部分はそれぞれ異なる<sup>(4)</sup>。

(1) 範囲副詞の説明には高橋 2006 を参照。朱德熙 1982 によれば、“也”は“都”と共に総括を表示する種に属す。範囲副詞には他に制限を表示する“只”等も含まれる。

(2) 副詞“也”の表示によって同一出来事と認められる部分は“scope”に当たり、楊凱榮 2000 は“辖域”または“语义指向”と呼んでいる。本論では「作用域」を用いる。

(3) 「副詞“也”の用法について」は『千葉商大紀要』第41巻第1・2合併号(2003年)に掲載。

(4) 呂叔湘 1980 は“也”を含む複文形式を a) “主語不同, 謂語相同或同義” b) “主語相同, 謂語不同” c) “主語不同, 謂語不同” d) “主語, 動詞相同, 賓語不同” e) “主語, 動詞相同, 動詞的附加成分不同” に分類している。本論に示した例文(2)の形式はd)、(3)(4)の形式はb)となる。



れる。

また、NPが省略された文では、主体に当たる要素を意味する語彙の範囲が特に限定されず、要素の具体化が不可能な場合もある。そのような文に含まれる主体は、抽象的表現「世間」「一般的」等と解釈されることが多い。次に例文を示す。

- (8) 不要把钱借给别人，也不要向别人借钱。（《金》）  
（金は借りてもいけず、貸してもいけない。）
- (9) 怎么都行的事，也就无所谓。不过，也有怎么都不行的。（《透》）  
（どうでもいいことは、どうでもいいんだよ。だけど、どうでもよくないこともある。）

(8)では禁止の内容“把钱借给别人”と“向别人借钱”に生じる対立関係の表示、(9)では“怎么都行的事，也就无所谓”直後の相反する内容“有怎么都不行的”の付加に“也”が用いられている。NPが省略された“有”構文に於ける“也”の機能については、また後に述べる。

以上のように、作用域をVPとする“也”を含む複文の形式は、[NP + VP, NP + “也” + VP]が基本となり、後部フレーズのNPの省略、両フレーズのNPの省略を含む合計3種類の形式が存在する。

## 2. 単文に含まれた“也”の作用域の推定

前章で紹介した複文ならば、文中に用いられた“也”の作用域は、前後フレーズの異同部分から容易に推定できる。ところが、文学作品等の文面では後部フレーズ[NP + “也” + VP]の部分のみが単文として提示される例も多く、その場合は推定が少し困難となる。

本章では例文として“也”を含む単文を提示し、作用域の推定の条件について探る。

### 2. 1. 数量を根拠とする推定

単文に含まれた“也”の作用域を推定するには、日本語の原文に於ける助詞の位置も重要な根拠となるが、原文との比較は必ずしも有効な手段であるとは言えない。現実には原文に「も」が使用されないにも関わらず翻訳に副詞“也”が使用され、然もその作用域がVPと推定される単文も多く存在する。例文を次に示す。

- (10) 他也不是专门探求古代民间工艺遗迹的那种人。（《雪》）  
（昔の民芸のあとをたずねてみるという柄ではなかった。）
- (11) 如同厨房，我也喜欢他们家的沙发。（《厨》）  
（その台所と同じくらいに、田辺家のソファを私は愛した。）

(10)(11)は原文に「も」が用いられないため、“也”の作用域の推定は、中国語による翻訳文の文脈から推定する手段に頼らざるを得なくなる。例えば(10)“不是……的那种人”は“他”に関わる条件として新たに付加された部分であり、その構成を示す“也”の作用域はVPと推定される。また、(11)“他们家的沙发”は“我喜欢”の複

数の対象物の一つと捉えられ、それを目的語とする VP が “也” の作用域と推定される。  
 (10) (11) の構成を図式化すると、次のようになる。

**図 2**

- (10) 他也 [不是 <专门探求古代民间工艺遗迹的那种人>]  
 「ではなかった」(価値の付加)
- (11) 我也 [喜欢 <他们家的沙发>]  
 「を(私は)愛した」(対象物の付加)

以上のように、VP を含む現象の数量が複数であると判断される場合には、“也” は新たな話題の付加を示すと捉えられ、その作用域は VP と推定される。但し、その推定には VP の主体の数量が単数であることも条件となり、動作主が (10) では “他” (11) では “我” に限定されることも根拠に含まれる。

この成立を確認するため、《银河铁道之夜》から “也” の作用域が NP になる例と VP になる例を提示し、それぞれの構成と作用域の推定の根拠となる条件を比較する。次に例文を示す。

- (12) 看到这情景，焦班尼也快活得要蹦起来了。  
 (ジョバンニはもうはねあがりたくらい気持ちが軽くなって云いました。)
- (13) 那当然。那它也是好虫子，爸爸说的。  
 (そうよ、だけどいい虫だわ。)

(12) では文中のジョバンニ (“焦班尼”) の反応が傍らのカンパネルラ (“柯贝内啦”) の反応と似ているため、“也” は類同の動作や反応を発する複数の動作主の存在を強調すると捉えられ、作用域は “焦班尼” つまり NP と推定される。これに対し、(13) では現場に “它” の示すサソリのみが存在し、そこに別の価値が含まれる可能性を新たに認める内容の発言が展開されるため、“也” の作用域は “是好虫子” つまり VP と推定される。従って、“也” の作用域が VP となる文では、NP を含む主体の数量が単数であることも条件として挙げられる。

以上の結果を基とし、NP の状況から想像される主体の数量、VP の内容から想像される現象の数量と “也” の作用域に当たる位置との関係について《表 2》を作成した。

《表 2》

	NP	NP の状況	VP	VP の内容	“也” 作用域
(12)	焦班尼	柯贝内拉が同伴	快活得要蹦起来了	反応	NP に推定
(13)	它	单独	是好虫子	価値の付加	VP に推定

このように、“也”作用域をVPと推定するには、主体及び現象の数量も重要な根拠となり、前者即ちNPを含む主体の数量が単数であり、後者即ちVPを含む現象の数量が複数であることも条件に含まねばならない。

## 2. 2. 文脈からの判断

単文にはNPが省略された形式〔“也”+VP〕も存在する。既に述べたように、主体の内容が認知された前提条件の下に提示された複文では、文面で省略されたNPに当たる主体の状況が読み手に想像され、VPとの関連性から“也”の作用域を推定することができる。ところが、NPを省略された単文が提示された場合、上記の手法を応用するためには、省略されたNPを含む主体の数量を前文との関連から判断せねばならない。次に例文を示す。

- (14) 快点还吧。也是为你好嘛。(《金》)  
(早く返したまえ、そのほうが君のためだぞ。)
- (15) 我想。也只有他这种人才会这样做。(《厨》)  
(とても彼らしい。)

(14)では“快点吧”が要因となって相手側に発生が予想される利益に関し、発話者が強く訴える内容の単文が構成されている。原文の「そのほう」は2種の選択肢の中から優勢である一方を示す表現であることから主体が単数であると判断され、VPが“也”の作用域と推定される。(15)の“只有他这种人才会这样做”は“他这种人”に関連する話題であるが、文全体が“我”個人の心理描写であるために主体は単数と判断され、“也”の作用域はVPと推定される。

また、単文には主体と現象の数量が共に複数である場合もある。そのような単文に用いられる“也”の作用域は、上記の手段では推定は困難である。そこで、原文に見られる該当部分の前後から、どのような状況で現象が発せられたかを確認する必要がある。

次の二つの例文では、主体が客体から慰めを受け、それに応じて発した態度が描写されている。

- (16) 所以也没有回答，只是握着的手用了一下力。(《透》)  
(だから返事をせずに握った手に力をいれただけだった。)
- (17) 青年也祷告般地回答。(《银》)  
(青年が祈るようにそう答えました。)

原文に見られる(16)(17)前後の部分を参照すれば、(16)は直前に「千桐は郷の言葉の意味を自分への慰めだとしか思わなかった」(17)は直前に「灯台守がなぐさめていました」の部分が見られる。これを根拠として主体の態度を客体から受けた慰めへの返答と捉えることにより、(16)(17)に描写される行為の発生には主体と客体の両者が関わりと判断され、“也”の作用域は共にNPと推定される。

更に、中文訳の段階で各語彙の作用に大きな変化が生じ、構成が原文と全く異なった翻

訳文の“也”の作用域を推定する場合には、主語の状況や目的語の内容について深く分析する必要が生じる。

次の二つの例文では、日本語の原文で主語に当たる語彙が中文訳の段階で目的語として処理された形式が構成され、それを含むVPの直前に“也”が置かれている。

- (18) 我也失去了对生的焦灼。(《金》)  
(生への焦燥も私から去った。)
- (19) 不出所料，这个家里也配备了复印机。(《厨》)  
(案の定、この家にはコピー機もひそんでいた。)

(18)(19)では原文の主語に当たる語彙「焦燥」「コピー機」が目的語“焦灼”“复印机”として処理され、“也”は新たな状況の発生を示すと捉えられる。目的語“焦灼”“复印机”の状況について、原文ではそれぞれ(18)「焦燥も～」(19)「コピー機も～」と表現され、同種の事物の数量は共に複数と判断される。これに対し、主語となる(18)“我”(19)“这个家里”は単数であり、(18)(19)に用いられた“也”の作用域は共にVPと推定される。

このように、NPが省略された形式や主体と現象が共に複数である形式の“也”の作用域は、前章で述べた数量だけでは推定は不可能であり、その場合には文脈から現場の状況を正しく把握する必要がある。

### 3. 様々な形式での応用

主体と現象の数量を根拠とする手法は、様々な形式の複文または単文に含まれる“也”の作用域の推定に応用できると考えられる。本章では、接続詞“既”との呼応による“既～也～”、「所在」を示す動詞“有”を述語とする“～有～、也有～”を例に挙げ、その可能性について探る。

#### 3. 1. 接続詞“既”との呼応

“也”は接続詞“既”と呼応して“既～也～”を構成し、等位複文に成立する並列関係の表示にも用いられる。次に例文を示す。

- (20) 他既哀怜驹子，也哀怜自己。(《雪》)  
(彼は駒子を哀みながら、自らを哀れんだ。)
- (21) 旁边的四五个工人既不作声，也不朝他看，只是冷冷地一笑。(《银》)  
(近くの四五人の人たちが声もたてずこっちも向かずに冷くわらいました。)

(20)の主体“他”は孤立した存在であり、類似の複数の現象を示すVPが“也”の作用域と推定される。(21)の“不作声”“不朝他看”は共に“工人”の表情を描写した部分であり、両者に成立する並列関係は類同と捉えられ、“也”の作用域はVPと推定される。主体“工人”が置かれた状況は“旁边的四五个～”とあるが、ここでは同じ現象を発する一集団として解釈され、単独の存在として捉えられる。

(20) (21) の構成を図式化すると、次のようになる。

図 3

┌─── 呼応 ───┐  
 ↓                  ↓  
 (20) 他 既 {哀怜驹子}, 也 {哀怜自己}  
       「哀れむ」      「哀れむ」

┌─── 呼応 ───┐  
 ↓                  ↓  
 (21) 旁边的四五个工人 既 {不作声}, 也 {不朝他看}, 只是冷冷地一笑  
       「声をたてず」「こっちを向かず」

“既～也～” が示す並列関係では、他に各フレーズの拡張が表示されることもある。次に例文を示す。

(22) 或者两者都是美。美既是细部，也是整体，既是金阁，也是笼罩金阁之夜。（《金》）  
 （おそらく美はそのどちらでもあった。細部でもあり全体でもあり、金閣でもあり金閣を包む夜でもあった。）

(22) では“既～也～”の使用が全文中2箇所を確認されている。先の“美既是细部，也是整体”では目的語“细部”“整体”に拡張変化が見られ、原文に「細部」「全体」とあるように“既～也～”は美が相反する両方面に及ぶ状況の描写に用いられている。後の“金阁”“笼罩金阁之夜”にもこれと似た関係が成立していると捉えられ、目的語に含まれる要素に複数の価値が含まれる状況を示す“也”の作用域はVPと推定される。

### 3. 2. 動詞“有”を含む形式

副詞“也”の作用域がVPとなる文体では、述語の部分に「所有」「存在」を示す動詞“有”またはその否定形“没有”が置かれる例も多い。“有”“没有”を述語とする例文の数を調査し、《表3》を作成した。

《表 3》

	“有”を使用	“没有” “没”を使用	合計
《雪国》	4	5	9
《金阁寺》	6	11	17
《透光的树》	17	3	20
《厨房》	7	3	10
《银河铁道之夜》	5	1	6



各段に記された作品毎の使用回数の合計数と《表1》の「作用域がVP」に記された数を比較すれば、“也”が用いられた例文では“有”構文に於いて用いられた例が全例文の数分の一を占め、その頻度が非常に高いことが理解できる。本章では、上記の手法を応用し、“有”構文に用いられた“也”の作用域の推定の条件について探っていく。

次に“有”または“没有”を述語とする複文にVPを作用域とする“也”が用いられた例文を示す。

- (23) 那里没有任何流动的东西，也没有任何变化的东西。(《金》)  
(そこは流れるもの、うつろうものが何もなかった。)
- (24) 我的这种心情，怎么说才会让你明白，我没有自信，也没有耐性啊。(《厨》)  
(こんな感情を、わかってもらうように説明する自信も、根気もなかった。)
- (25) 茶花和菊花的花，虽有甜味，但也有苦味。(《透》)  
(菜の花も菊の花も、花には甘みがありますけど、苦味もあるんです。)

(23)(24)では“没有”の複数の対象物に成立する並列関係が“也”によって強調され、(23)“流动的东西”“变化的东西”、(24)“有自信，也没有耐性啊”“有自信，也没有耐性啊”がその対象物に当たる。(25)に用いられる“虽～但也～”の機能は“有甜味”“有苦味”に成立する転折関係の表示と捉えられ、この構成によって“也”の作用域が更に明確にされている。

(23)(24)(25)は何れもNPが文中に明記され、その状況が把握できるので、主体の数量を根拠として“也”の作用域が推定できる。然も、前後のフレーズでは共通の動詞“有”の直後にそれぞれ異なった目的語が置かれているので、作用域はVPであると容易に判断される。

ところが、〔“也”+“有”〕を含む単文が提示された場合、“也”の作用域を推定するには、NPの状況やVPの内容を正確に把握する必要が生じる。然も、NPが省略された単文では、主体や現象の数量が明確にされないため、前章で既に述べたように、やはり文脈から推定の条件を判断しなければならない。次に例文を示す。

- (26) 这一带当然也有很多人从事农业生产……(銀)  
(この辺ではもちろん農業はいたしますけれども……)
- (27) 为什么逃不掉？也有逃掉的嘛。(《透》)  
(どうして逃げられない？逃げるやつもいるよ。)
- (28) 也有为了生存非忘掉不的人呀。(《透》)  
(生きるために、忘れなくちゃならない人間もいるさ。)

(26)のNP“这一带”は、存在の形態が単独と解釈されるが、構成では特定の対象物を指示する代名詞“这”が置かれることから、この表現は広範囲にわたる地域内での一部分を示すものと捉えられる。然も、原文の“也有很多人从事农业生产”に当たる部分「もちろん農業はいたしますけれども」では農業以外の話題に全く触れていないことを根拠に、発言の内容に含まれる現象は単独と判断され、“也”の作用域はNPと推定される。

(27) (28) は NP が省略された文であり、動詞“有”は共に「存在」を示す。(27)では“逃掉的”(28)では“为了生存非忘掉不可的人”の付加に用いられ、“也”の作用域は VP と推定される。

(26) (28) の構成を図式化すると、次のようになる。

#### 図 4

(26) 这一带当然也 [有很多人 <从事农业生产>] ⇒ “也”の作用域は NP  
「この辺では」(場所の限定)「農業はいたします」

(28) 也 [有 <为了生存非忘掉不可的人>] 呀 ⇒ “也”の作用域は VP  
「もいる」(存在物の付加)

この形式の文では本来ならば場所を示す語彙が主語に置かれ、現象の発生する地点が明確にされる。但し、(27) (28) のようにそれが記されず、挿入されるべき語彙が特に限定されない場合には、既に述べたように、主体は抽象的な表現である「世間」「一般的」と解釈されることが多い。

#### 4. おわりに

複文に用いられる副詞“也”の作用域は、全文の構成からほぼ正確に推定できる。ところが、単文の場合には、主体及びその行為や状態の数量が重要な根拠となり、NP が省略された文では、更に文脈から主体の状況を把握しなければならない。

本論では、“既～也～” “～有～、也有～”の構成による複文または単文を例として挙げ、これらの構成の中で“也”が発揮する機能について述べた。前者に関しては、文中の二つの要素に成立する並列関係を“既”との呼応によって示す機能について述べ、それらの要素に拡張変化が発生する例も挙げた。後者に関しては、並列関係だけでなく、“虽”と呼応して転折関係を示す機能についても述べた。また、NP が省略された場合、“也有～”の主体に当たる部分には抽象的な表現「世間」「一般的」との解釈が適切である場合が多いことも判明した。

“也”の機能について広範囲に及び理解するためには、上記以外の形式についても深く分析を進める必要がある。それらの結果を基として、作用域が NP と VP の何れになるかを判断する条件の更なる調査を今後の課題としたい。

## 用例出典

- 《雪》 = 艾莲译『雪国』人民日报出版社 1979 年 / 川端康成著『雪国』岩波書店 1952 年。  
《金》 = 唐月梅译『金閣寺 / 潮骚』译林出版社 1998 年 / 三島由紀夫著『金閣寺』新潮社 1960 年。  
《透》 = 林青华译『透光的树』人民文学出版社 2002 年 / 高樹のぶ子著『透光の樹』文芸春秋 2002 年。  
《厨》 = 李萍译『厨房』上海译文出版社 2004 年 / 吉本ばなな著『キッチン』新潮社 2002 年。  
《银》 = 周龙梅译『银河铁道之夜』青岛出版社 2006 年 / 宮沢賢治著『銀河鉄道の夜』新潮社 2002 年。

## 参考文献

- 朱德熙《语法讲义》商务印书馆、1982 年。  
高橋弥守彦『实用詳解中国語文法』郁文堂、2006 年。  
马真〈说“也”〉、《中国语文》第 4 期、1982 年、283—287 頁。  
杨凯荣〈“也”的含意与辖域〉、『中国語学』247、2000 年、172—187。  
吕叔湘《现代汉语八百词》商务印书馆、1980 年。  
黎锦熙《新著国语文法》商务印书馆、1924 年。

## 〔抄 録〕

中国語の副詞“也”が含まれる〔NP + “也” + VP〕は、“也”の作用域がNPの場合とVPの場合では文意が大きく異なり、全文の正確な訳出を求めるためには、作用域の位置を確認する必要がある。但し、“也”の作用域は文体が複文ならば前後フレーズに含まれる語彙の関係から容易に推定されるが、他フレーズとの比較が不可能である単文が提示された場合には多少困難となり、特にNPが省略された文体では、前後の内容から更に主体の該当者を推測せねばならない。そこで、“也”の作用域を推定する根拠としてNPを含む主体或いはVPを含む行為及び状態の数量が挙げられ、この条件に従えば、前者が複数、後者が単数ならば“也”の作用域はNP、その逆の条件が成立した場合にはVPと推定される。

VPを作用域とする“也”は“既”との呼応によって並列関係の表示または強調を表示し、その内容には拡張変化も含まれる。また動詞“有”が含まれる“也有～”でも同様の機能が發揮され、“虽”との呼応では転折関係が表示される。これらの例文に含まれる主体や行為及び状態の数量が“也”の作用域を推定する根拠となり、その結果には上記で示した推定の条件が成立している。